

銅直勇先生と日本大学

馬場 明 男

一

銅直勇先生が京都大学で、米田庄太郎博士指導のもとに社会学を専攻され、卒業後、学究の徒として本格的に真理探究の道を辿られたのは、先生が日本大学に講師として社会学を教えてからであったといっても誤りではないであろう。先生は大学を終えられてから、当時から有名である大原社会問題研究所（大阪市伶人町）に入所され労働問題の調査研究に従事したことがあったが、この研究所に移めておられたとき、ご自分の研究の不十分なことを自覚され、京都大学の文学部社会学専攻の大学院に学生として籍を置かれた数年の間、竜谷大学の講師として社会学を担当されたことがあった。しかし本格的な学者として社会学の研究につとめられたのは、先生が大正十四年から昭和十三年という長期に亘って日本大学の文学部社会学科（担当はフランス社会学史と社会学演習、社会史）ならびに経済学部講師として教鞭を執っておられた時であった。私自身もこのころの学生として、先生が真摯な態度で研究に精進されておられた姿に接したものであった。

このころの先生の本務は成城高校の教員であって、ときには経営陣にも参加されていたが、この仕事は先生にとつては不本意なものであったようである。

第二次世界戦争の激化とともに先生は郷里熊本にもどられて、師範学校の校長として師範教育に尽されたようであ

った。戦争が終ってから昭和二十四年、新制大学が発足した時期、横浜国立大学の学芸学部長に就任されたようであった。しかし此処は旧制の師範学校時代の教員と新制大学になってから新らしく採用された教員とが調和されなかったため、先生は随分ご苦労があったようであった。昭和二十九年ごろ暫くぶりで先生にお目に見合った折、そのことを先生は述懐されておられた。それまで先生は成城学園の校長、戦時中熊本師範学校の校長、更に戦後、横浜大学の学部長、また晩年明星大学の人文学部長など歴任された経験から考えると、先生は学校経営のベテランであったにも拘らず、学者としての先生には必ずしも満足のいくものでなかったようであった。学徒としての先生の眞価を知っている私は、先生を稀有の学者であると思っている。その意味で、先生が日本大学の社会学科に非常勤として教鞭をとられていた十数年の間、それから戦後日本大学の教授として学究生活をされていた約十年間が先生の一番生き甲斐のあった時期だったといっても間違いない。その意味で、私は先生の追悼論文集が編集されようというこの機会に「日本大学と銅直先生」という一文を寄稿するものである。

二

わが国で最初に社会学が導入され、この学問が講義されたのは明治十一年（一八七八年）であるが、今日から数えて百年にもなる。日本の社会学の歴史について書いている新明正道博士によると、世界の社会学が学問体系として結実したのは十九世紀の七、八十年代だといっているが、これから考えると、わが国が社会学を大学で講義したのは比較的最早いものであった。これはわが国が明治維新後急速に近代化の道を辿ったため、政治経済はもちろん文化の各分野に近代化を促進するために、相当早い時期に近代社会に造出された国々の新しい学問を受容したということができる。このことを詳細に述べることはできないが、旧制の官立大学である帝国大学で、最初に社会学を講義したのはフエノロサであった。

厳密にいうと、フエノロサは社会学者ではなかった。しかし彼の本国であるアメリカでは、スペンサーがイギリスからアメリカに渡航し社会進化論を普及した時代であって、社会進化論が社会学を勉強する者の研究方法として確乎たる地位を獲得したところであったから、フエノロサがアメリカから日本政府に招聘され、帝国大学で社会学を講義するにあたって、当時アメリカで最も歓迎されていた社会進化論をとりいれた社会学を教えたからといっても決して不思議ではないのである。教師としてわが国に滞在中、東洋の美術に強い魅力を感じ「東洋美術史」という名著を残していた。このフエノロサの東洋美術史は東洋の美術を理解するうえで貴重な文献であったにも拘らず、長らく幻の著書であったが、森東吾教授によって邦訳されたのは最近における快事ともいふべきであろう。

東大で社会学が正式に一学科として採用されたのは、外山正一博士からであった。ある意味では日本最初の出来事であった。こうした新興科学が一つの学科として確実なものとなったことは、当時の文部省当局の達見というべきであらう。

歴史的に見ると、日本大学が大正九年（一九二〇）に私学として社会学科を正式に置いたのは、わが国でもっとも早いものであった。当時、京都大学の文学部で社会学を専攻し、その後母校である日本大学に就職し、山岡万之助博士に協力して、社会学科を日本大学に置いた功績は円谷弘博士であった。円谷教授が勉強した京都大学には主任教授米田庄太郎博士がおられ、そのころの弟子には高田保馬博士、明星大学が社会学科を創立して以来、約十年間社会学科の主任教授の地位についておられた銅直勇先生、それに銅直先生より多少後輩であった円谷弘先生が学生として研究に励んでいたものであった。学生であった銅直先生が京大の図書館に参考書を借りに行ったら、其処に貸出のアルバイトをされていた円谷先生がおられた、その時学生証を忘れた銅直先生はたしなめられたことを銅直先生は私に語っておられた。

銅直先生とごく昵懇であった円谷先生が大正九年に神田三崎町の日本大学に社会学科を創立したことは、今日から考

えるとともに聡明というほかないし、円谷先生の識見はすばらしい遠大なものである。そのときの日本大学社会科の講義題目と講師陣を挙げて見ると次の通りである。

開講課目

講師名

社会学	遠藤隆吉
輓近社会思想（前期）	杉森孝次郎
輓近社会思想（後期）	児玉達童
社会政策	円谷弘
社会問題研究	大場実治
社会心理学	山田珠樹
植民政策	平元兵吾
西洋哲学史（前期）	四宮兼三
西洋哲学史（後期）	出隆
心理学	渡辺徹
倫理学	佐々木秀夫
社会史	原随園
経済原論	藤井英信
憲法	金森徳次郎
民法	長島毅
刑法	山岡万之助

これらの課目のほか工場管理、労働問題、都市計画、都市行政などが含まれていた。

日本大学に社会科が設置されたのは大正九年であったが、この時の講義担当者のなかには、銅直先生は名前を列らねてはいなかった。たしか先生が日大社会学科に関係をもたれたのは大正十四年であった。ご担任の課目は社会史、社会学演習、フランス社会学史であつて、先生が関係をもたれたときには学部が発足していたときであつた。桜井庄太郎氏と私は学年は違っていたものの、銅直先生担当の社会史は机をならべて受講した思い出もある。社会学演習は学部の学生だけであつたが、社会史や社会学史の講義は、専門部の学生と一緒にあつただけに、最初ブラックの教室に一杯溢れるようであつたので、声の低い先生にとっては大変骨の折れたことであつたらしかつた。勿論、そのころの教室などには今日のようなマイクの設備などはなかつたから、先生は精根を傾けたようであつた。私が先生の学生として社会学演習を拝聴したのはたしか昭和二年だつたと思う。教材はコロンビア大学の出版部から発行されていたゲールケの「デュルケームの社会学に対する貢献」であつた。その後先生はこの演習のテキストにベリーの「進歩の観念」などを使用したこともあつたが、これは先生がコンドルセに関し特別関心を払つておられたからであらう。先生が明星大学を隠退されてから、大学の研究室で購入された蔵書のなかには、容易に手にいれることのできないようなコンドルセに関する著書などあるのを知つて、先生の旺盛な研究がフランス近代史とその周辺にあつたことが窺われたのであつた。私の同期生は僅か五名であつただけに、先生の演習の時間は殆んど休むことがなかつたのは、先生も殆んど休講でなかつたからでもあつた。元来私などは蔵内先生に師事してジンメルやカール・ブリンクマンなどに関心をもっていたが、それでも銅直先生を通じ、先生のフランス社会学の演習に出席していたお蔭で、知らず知らずの間にデュルケーム社会学などある程度理解できるようになつた。そのころ先生は既に成城に住居を構えておられたが、現在なら渋谷からバスも直通で行くし、小田急に乗れば成城には急行も停車してそう骨の折れることもなかつたが、当時としては成城から玉川電車の砧まで徒歩で出掛けられ、此処から玉電に乗って渋谷駅に着いて、国電で水

道橋にかよっておられたそうであつた。しかも田舎路は現在のように隅々まで舗装されてなかったから、先生は神田に出講される際は、いつもゴム長靴をはいておられた。あるとき学生の一人が先生に長靴着用のことをお尋ねしたら、その気苦労がはじめて明らかになってから、私達は先生の授業だけは休むことがなかったので、先生は私たちをマジンメ人間といわれていた。先生は日大では社会学演習のほか社会史とフランス社会学史を担当しておられたが社会学史の講義には相当重点を置いていたようであつた。これは京都大学の社会学科の開設の功労者である米田庄太郎博士が各国の社会学理論、社会学思潮に通曉していたばかりか、博覧強記の学者であるので、その伝統を継いだ円谷先生は、とくに社会学史に力点を置かれ、三ヶ年の課程でフランス社会学史、ドイツ社会学史、乃至は英米社会学史の三課目のうち二課目を必修として履修しなければ卒業させなかった。私は蔵内先生のドイツ社会学史と小林郁先生の英米社会学史を聴講したため、銅直先生のフランス社会学史を受講する機会はなかった。そんな関係で私も昭和十四年以来日本大学で専門課目を受持つていたが、そのころから私にはいつも社会学史が割り当てられていた。

昭和二年には「社会学徒」という社会学雑誌が発行された。これは日本大学社会学研究室の雑誌でなく、社会学徒社という名のもとに生れた団体から発行されたもので、實際上の編集は昭和二年から昭和十六年という長期に亘つて当時日大工学部の図書館の主事であつた桜井庄太郎先生（晩年明星大学教授となり一九七〇年現職のまま死去された）が担当されていた。桜井氏が日本大学在任中、私は工学部の専任教員であつたので、授業のあい間、或は授業終了後、いつも図書館に立ちよつて桜井先生と懇談したり或は学界の動向などの話を聞いたものであつた。この図書館にそのころ滝澤成君という大正大学の史学科を卒業し、ここの職員となつた人がいた。この人の祖父さんが生妻事件の関係者の一人であつたことも興味をもたしてくれたが、この人からも歴史的な事件を聞くことが楽しいものであつた。この時期の銅直先生は成城高校の校長として大変忙しい毎日であつたようだったが、それでも先生は教育視察という名目で仏蘭西に旅立たれ、巴里から記念の絵葉書をいただいたこともあつた。この一枚の葉書は戦災で焼いてし

まったが、私の記憶に間違いがないとすればセイヌ河と有名な教会であったと思う。半歳ばかりして成城学園に学園騒動が勃発したため（このことに関しては私は断片的にしか知らない）、そのことを正しく書くことはできない）約半年ばかりの滞在で帰国されたのであった。こうしたあわただしい情勢下でも先生は日本大学の講義は続けられておられた。先生が日本大学で担当されておられた社会史は、日本の学界では、あまり正確な理解はなかったようであったし、参考文献も全く少ない時代であった。せいぜい本庄博士の「日本社会史」（改造社）が発行されていた程度であつて、これより相当あとになってから、滝川政次郎博士の「日本社会史」などが発行された。とくに滝川先生は日大法学部で日本法制史を講義していたが、この講義を数ヶ月に亘って拝聴したが、学期の途中、建国大学に赴任されたので最後まで先生の法制史を聞くことができなかった。先生は終戦後、国学院大学の教授となられたので、私も近くの実践女子大学に出講していたので機会をとらえ教授を二三回訪つねたが残念乍らお会いすることができないうちに、ご逝去されてしまった。滝川博士の「日本法制史」と「日本社会史」は名著といわれている。昭和の初頭、大学で社会史の講義を教えたことは、極めて珍らしいことであつた、鍋直先生の社会史から強い感化をうけ、大学を終えてから、社会史的観点から日本封建社会意識の研究をされたのが明星大学の教授となられた桜井庄太郎博士であつた。

桜井庄太郎先生は「封建社会意識―恩と義理」を脱稿し、これを学位請求論文とされたが、桜井教授は若い頃からフランス語に堪能であつて、フランス社会学に通じておられた。これは先生が古野清人先生や山田吉彦（キダミノル）さんと親交があつたからと思う。とくに山田吉彦さんはいつも工学部の桜井先生の部屋でお目に掛けることがあつた。戦争が激しくなつて八王子市郊外あたりの農村に山田さんの疎開を世話されたのは、そのころ青年団の職員として青年運動に携わつていた桜井先生のお世話であつたらしい。山田さんはこの疎開先きの村を社会学の観点から描写したものが、大変有名になつた「氣狂い部落周遊記」であつた。この桜井先生の博士論文の主査を務められたのが

銅直先生であつて、桜井教授はご自分の論文の研究方法としてモースの贈答試問（贈与論）のなかのボトラッチを利用していたが、桜井先生の恩師であつた銅直先生の論文の講評によると、未開社会の慣行で、封建社会の社会意識の説明には十分でないことをいわれておられ、相当書き改められ、立派な論文とされたようであつた。私は銅直先生の一面学問に対する厳格さ、容赦のない態度に心から感銘したものであつた。

社会史という学問は、今日では比較的に一般化された学問として認められているようであるが、その当時としては極めて稀な学問のようであつた。それだけに銅直先生の社会史の講義は貴重なものであつた。しかしながらそのノートが単行本として残っていないのは洵に残念なことである。しかし先生の論文「徳川時代における町人精神」「江戸町人の金銭観」「徳川時代における強制的土地均分制実施の失敗」「座の意義及びその発達」等々は社会史の分野において価値多いモノグラフというべきであろう。このうち最初の論文などは、銅直教授と同窓生であつた私の恩師円谷弘先生が京大を卒業するに際し、この論文から多くの示唆をうけたものといわれている。銅直先生が先駆的役割を演じておられた社会史という学問は、最近になって再認識されている、それを証拠づけるものが、一九七九年九月号の「思想」であつて、これは社会史特集として発行されている。とくに柴田三千雄、遅塚忠躬、二宮宏之の「社会史を考える」という鼎談の記事、さらに中井信彦の史学としての社会史など有意義なものであるし、これらの論文に接しているとき、私は昭和の初期、すでに社会史を担当していた銅直先生の学問的地位を更めて見直すものである。この銅直先生の思想を継承し、更にその思想を発展させたのは、私の先輩桜井庄太郎博士であつた。桜井庄太郎先生は一九六〇年代の開始とともに奈良女子大学社会学科の主任教授として赴任せられ、関西地方の各大学に講義を担当されていただけに、関西学界では重きをなしただけに、桜井教授の評判は極めて高いものであつた。大道安次郎博士はあるとき私に日本大学の社会学科の特色は歴史に通暁し、歴史意識に対する理解のあることを強調されておられたが、まさにその日大を代表するものは桜井庄太郎博士であらう。惜しいかな、先生は一九七〇年私が世界社会学会議でブ

ルガリアに出張中にご逝去されたのであった。銅直先生はいつも桜井先生の死を悲しんでおられていたようである。戦争は歴史の流れを変えるものである。第二次大戦が次第に激化し、日本の戦局が極めて悲観的情況となるにつれ私も病氣静養のため家に引籠もってしまったが、銅直先生も戦争のさ中に成城学園を退職し、熊本師範学校の校長となられ、戦時中の師範学校で教員養成に力をつくしたのであった。

三

先生の師範学校長の職は昭和二十四年まで引続いて就任されていたが、学制の改革とともに再び上京され、こんどは神奈川県鎌倉に創立された横浜国立大学の学芸学部長となられ、神奈川県教育研究所長をも兼任された。私も戦後母校日本大学法文学部の教授に就任した。恩師円谷博士は追放となったため、主任教授の職を代行することとなった。昭和二十八年、日本大学社会学研究室の機関誌として「社会学論叢」が発刊されたが、その時点までには私は銅直先生とようやく接触ができ、この雑誌に先生の玉稿を掲載することができた。このときの論文名は「社会概念の市民的系譜」であった。この雑誌の発刊されたところから日本大学社会学科も大学院（修士課程）を置くことを計画した。そして昭和二十九年大学院の申請を行った。丁度この年に銅直先生は横浜国立大学を定年退職されることとなっていたので、先生を正教授として日本大学にお迎えすることとなった。

この大学院の講義を担当する教員のメンバーは私を中心として弟子の斎藤正二教授、杉山栄教授とともに銅直勇先生からも承諾をいただいたのであった。私は大学院の構想を具体的に相談するつもりで鎌倉の先生の公舎にでかけた。そのとき私と一緒に同行したのは、戦前成城高校で先生からお世話になった鈴木知太郎教授であったので、旧知の鈴木君が一緒だったので先生は大変喜ばれ、大いに歓待してくれた。先生のご注意などあって、日本大学の社会学科の大学院は恙なく認可された。銅直先生とともに大学院担当の教授になった杉山先生は、私の恩師が文部省の留学

生として独乙に滞在中、ベルリンで親しくなられ、昭和の初期「社会学十二講」「社会科学十二講」を出版し、学界で周知の社会学者であった。独乙から帰朝し母校早稲田大学に就職の希望があった。結局、教授にならなかったため故郷の新聞社（山陽新聞）に就職され、その後編集長か副社長にまで昇進したが、戦争の終結とともに追放になったが、この追放から解除されてから、日大社会学科大学院が実現する前年、岡山から上京され、日本大学に教授として就任したものであった。私も学生時代から杉山先生の著述を通じ、いろいろと啓蒙をうけ、蔭ながら先生を尊敬していた。先生は長く新聞記者の経験があっただけに、極めて庶民的な人であったので学生生活に溶けこんで、学生生活の隅々まで詳細に触れ、学生の面倒見の良さは驚くほどであった。丁度日本大学の歴史はじまって以来の大規模な学生騒動がはじまろうとしたころ、軀を害ね、大学を退職され、故郷岡山に引籠ってしまったが、昭和四十二年五月に急逝されたが、大学紛争中であつたため、私は先生宅に弔問に出掛けることができなかったが、翌年十一月十六日新宿の東京会館で私の司会のもとに「杉山栄教授を偲ぶ会」を開催したのであった。この追悼会を催す以前、十月二十一日早稲田大学に日本社会学会大会がもたれたが、この機会に私は「日本社会学史上における杉山栄教授の地位」という題目で、私の研究を披露し、戦後私との間で交換した手紙のうち先生のもの約百通ほどを編集した書簡集を広く来会者に配布したものであった。新宿の東京会館には、早瀬利雄博士、富田富士雄博士、貫伝松教授とともに銅直先生も参加され、ともに杉山先生の高い学識、清潔なる人格、温情あふれるその性格とともに偲んで、なごやかな晩秋の一時を過ごしたものであった。

戦後、日本大学の体制が次第に整ってくるにつれ、他の大学と同じように定年制を実施した。銅直先生が教授として日本大学に就職された時期には定年制がなかったが、この定年制とともに、銅直先生も昭和三十九年三月退任されたのであった。あれほど私を可愛がってくれた恩師と訣別することは堪えられなかったが、丁度、教育界の長老児玉九十先生の創意で明星大学にも社会学科が発足したので、多年児玉先生と昵懇であった銅直先生は明星の教授として

迎えられ、昭和四十三年人文科学部長となられ、他学科とともに発展育成に努力されたのであった。先生が明星大学社会学科のため燃ゆるような理想と遠大な抱負とで、不惜身命の精神で尽力されてから十年、昭和五十二年六月十六日市ヶ谷私学会館において銅直先生の米寿の祝賀会が開催された。当日は明星大学の教え子、成城学園の教え子、日本大学時代の教え子等々会する者約二百名、実行委員長は三好豊太郎教授、児玉九十先生、新明正道博士その他前田陽一、井原敏男、松田智雄、加藤一郎、山室周平、斎藤正二、早瀬利雄、百瀬甫の諸先生の祝辞があり盛会裡に散会したが、当日銅直先生の著作集が来賓に贈呈された。

この会より二年経過した今夏（昭和五十四年）にわかに先生は逝去された。が、日本大学と先生との関係は私が拙稿によって浮彫りしたことで概略つきるが、先生の著作目録によってしらべた限りでは、先生が日本大学で発行している諸雑誌に約十篇の論文を寄稿しておられるが、これらの論文はいづれも学界を指導しうる珠玉のような力作であるが、最近私はイギリスの社会学者オークレイ女史の主婦の社会学を読む機会があり、戦後ウーマンリブの発達とともに主婦の社会的地位の向上が問題となりつつあるが、銅直先生が今から五十数年前の昭和二年の「社会学徒」（第一巻第七号）に「奥さんの賃銀制度」という力作を掲載しておられるが、勿論、この論文はオークレイ女史の論文とくらべれば、全く素描であるが、しかしその見解はウーマンリブが問題視されていなかった当時としては、まことに卓見というべきであろう。こうした主婦論を展開した理論的背景には、先生の社会学的考察には鋭い批判精神がふくまれているというべきであろう。

（ばば あきお、本学教授）